

genitourinary syndrome

その診療の役割と課題

三井記念病院

中田 真木

GSM (genitourinary syndrome of menopause) は2014年に北米閉経学会と国際女性医学学会が共同でリリースした臨床概念で、わが国では、閉経関連泌尿生殖器症候群、もしくは閉経関連尿路性器症候群 などの訳語が指定されている。GSMの指す状態は、外陰腔萎縮と何ら変わらない。

エストロゲン欠乏により腔の粘膜は萎縮し粘液が減り、性生活に適しない状態になる。更年期医療の関係者は20世紀最後の四半世紀からこのことに注目していた。GSMの診断要件は、《外陰部と腔の違和感》《性生活の障害》《下部尿路機能障害》のいずれかが自覚され、自覚症状が苦痛を与えており、他の原因が見当たらないことである。閉経に伴う性機能の低下という課題が強調されていたことがわかる。

《外陰部と腔の違和感》については、GSMの症状と見なし得るかどうかには少々疑問が残る。20代から40代にかけて帯下や外陰部の痒みなどの局所症状を自覚する人は増えるが、50歳以降の閉経移行期を過ぎるとこれらの自覚症状は減る。これらはエストロゲン欠乏というよりも体形変化（陰唇の垂れ下がり）、月経不順、パッドの使用などに関連している可能性がある。

次に《性生活の障害》についてであるが、閉経移行期から先、性機能の維持には生殖医学的意義はなく、一般人口の性生活への関心もどんどん下って行く。「性生活に適しない状態になるのを手をこまねいて見ているのがいけないのだ」と性医学関係者は抗弁するが、どれだけのニーズがあるかは未知である。

若い女性におけるエストロゲン欠乏は、リアルタイムで性生活の障害となって現れる。乳がんの治療を受ける女性では、複数の要因が重なり性機能の低下が重荷となりやすい。出産後に授乳する女性は数ヶ月間エストロゲン欠乏状態になり、この間、尿失禁、性交痛、出産時からの創痛などを治療しようとするとうエストロゲン欠乏状態がハードルになる。かかる状態をGenitourinary syndrome of lactation と呼ぶ人もいる。

《下部尿路機能障害》は言うまでもなく、明らかなunmet needs となっている。閉経後の腔には慢性炎症が起こりやすく、腔は鉛管状に硬化する。慢性炎症の要因は、加齢、エストロゲン欠乏、不衛生な前庭部と腔などである。隣接する尿道も異変に巻きこまれ、刺激症状や機能低下を呈しているはずであるが、残念ながらあまり研究されていない。